

平成 27 年度宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成 27 年度 第 2 回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成 28 年 3 月 16 日 (水) 18 時 00 分～ 20 時 00 分
場所	宇治市役所 6 階 602 会議室
出席者	(委員) 榊原会長 薮副会長 久世谷委員 船川委員 内田委員 松井委員 山下委員 石田委員 天花寺委員 (事務局) 石田教育長 畑下教育部副部長 藤原参事 瀬野センター長 河田教育総務課長 富治林教育支援課長 金久一貫教育課長 市橋一貫教育課副課長 青木一貫教育課教育指導係長 赤野一貫教育課指導主事 姫野一貫教育課指導主事 瀬戸一貫教育課指導主事 山花一貫教育課学校教育指導主事 大越一貫教育課学校教育指導主事 辻一貫教育課総括指導主事
配付資料	平成 27 年度第 2 回宇治志小中一貫教育推進協議会資料 平成 27 年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書・概要版 南宇治中学校ブロック、宇治ひろの学園 宇治黄檗学園の各ブロック取組報告資料
<p>1 開会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・石田教育長 開会挨拶</li> <li>・小中一貫教育チーフコーディネーター紹介</li> </ul> <p>2 報告及び協議事項</p> <p>(1) 報告 1 平成 27 年度宇治市小中一貫教育の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局より資料 (1～2 頁) に沿って説明</li> <li>・宇治ひろの学園より取組報告</li> <li>・南宇治中学校ブロックより取組報告</li> <li>・宇治黄檗学園より取組報告</li> </ul> <p>(会長)</p> <p>事務局の報告にもあったが、小学校と中学校が集まって授業について話をするとは      どのような点で参考になるのか。</p> <p>(小中一貫教育チーフコーディネーター)</p> <p>小学校の教師は、教え方等が丁寧である。教具も丁寧に作るなど、中学校教員として      学ぶべきところがある。中学校の教師から小学校の教師に学んでもらいたいのは、授業      規律の面である。「まず落ち着いて授業を受ける」というところを小学校の先生は学ん      でくれている。このように小中の教員がそれぞれ学べている。</p>	

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

授業面では、小学校から学ぶことが多い。小学校の教員は中学校の規律等、生徒指導面で学ぶことが多い。

授業の面は、小学校で、子どもたちが双方向に話し合う、自分の考えたことを表現する等を中学校の授業に活かしている。授業に至るまでの規律、生徒指導の方法、「チーム」、「学年」で規律を作っていく「チーム力」等は、小学校の教員が学ぶことが多い。小中教員共に「より良いものを作っていこう」という気持ちを持っている。

(会長)

刺激を受け合って、小学校あるいは中学校の授業が変わってきたということはあるか？

変わってきているという実感は持っているか？

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

変わっていかなければならないという思いがある。簡単にはいかないという実感もある。

中学校は、学習量、進度、受験を控えている等、小学校と同様にはできない。

ただ、「小学校での指導の良さ」を活かすようにという気持ちで中学校も指導している。止まってはいない。進んではいる。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

中学校籍の連携教員が小学校で行う授業でも、中学校の授業と同様に、「号令に始まり」と授業を開始している。小学生には「中学入学後はこうあるのだ」ということを連携教員によって指導できている。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

今年度、小・中でそろえたのは、グループ学習である。小学校低学年からペア学習等を行い、高学年になると3人、4人と人数を増やしている。夏の研修で小・中、お互いの授業を見合って、中学校でも4人組グループ学習をするという方向に進めた。

授業スタイルをそろえる、展開、板書カード等、小・中で取り組んでいる。

指導方法についても小・中で協議できる。中学校ではこのように指導するので小学校でも「中学校に向けた指導方法」に変えながら進めるという話し合いはできる。

(委員)

小中連携・小中連携で児童生徒がどう思ったのか。児童・生徒の思いを次に効果的に活かせる、反映できるというものはあるのか？

(会長)

「量」と「質」という言い方をすれば「質的な面」にポイントを置いたフィードバックはあるか？「エピソード」というような。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

中学校1年生が小学校1年生に読み聞かせをしている。取組後は、小学校1年生が中学校1年生に必ず手紙を送る。このような形でやり取りをしている。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

帰国生徒理解学習を終えた後は、小学生が演舞をした生徒に対して手紙を書く。生徒には励みとなる。

夏季休業中に三校の児童会・生徒会役員が一堂に会して、合同でできることを協議している。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

意見を反映して改善することはまだできていないが、取組をした後に通信を発行している。子どもたちの感想から抜粋したものを通信として子どもたちに返している。

(委員)

宇治黄檗学園は、体育大会も小・中、同日に行っているのか。

他のブロックでは、小学校に、中学校の先生だけでなく、生徒の一部でも小学校に来て種目に参加することはできないのか。

小学生の「中学校体験」がある。中学生はその時に、リーダーとして活躍している。

そのような形で、生徒が一部でも小学校に来て、「中学生すごい！」という取組をしてもらいたい。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

宇治黄檗学園に関しては、小中同日の一体化した体育大会はしていない。ただ、別開催ではあるが、小中の交流は行っている。中学生は小学校の体育大会にデモンストラーション競技で、部活生徒がリレーをして、ダイナミックな走りを見せる。小学生がそれに憧れを持って、意欲につなげていく。このようなことは、他ブロックでも可能ではないかと考える。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

行事で交流していることは本ブロックではない。中学校合唱コンクールで優秀賞をとった学級の合唱を小学生に聴かせる、「あのよう合唱ができるようになりたい。そのために今から取り組んでおこう」という取組を展開できないか推進委員会で協議している。

(会長)

学校経営の問題もある。校長先生のお考えは如何か？

(委員)

児童生徒が交流するというのは外から見られる時には、アピール性は大きい。

校長としては、ブロックには「このような特徴がある、課題がある」。その解決のために「このような手立てが必要である」ということをデータの裏付けを持って提起していく。「小中一貫教育で培っていくものは何なのか」、「義務教育を終えた時にどんな子どもに育てたいのか」、それに向けて段階的に高めていくことを企画立案すること、マネジメントすることが三校の校長、教頭にとって大事である。それを具体化するのが、チーフコーディネーターであり、各校のコーディネーターである。

(委員)

一体型の場合は、教務主任の協働ですぐに交流ができる。分離型は物理的などころでも厳しいだろうと思う。交流は見た目はよいが、その交流で子どもたちに何を学ばせて、どう育てるのかということ小中の教員が持っていないといけない。

授業研究等においては、小小連携で、「同じ視点」で児童を育て、中学校に上げているのか。つなぎをもっと大事にしていかなければならない。

(委員)

南宇治中の中国帰国児童生徒の理解学習は評価を得ている。小中一貫教育を実施するまでは、小・小で交流がなかった。中学校に入学しても壁を感じた。ここでブロックの課題が明確になり、何をすべきなのか、何を仕掛けるべきなのかを明確にした。何をするのか明確にすることが小中一貫教育では大事である。特に施設分離型では。

(会長)

「小中一貫教育の取組」が市民・保護者に見える方がよいと思う。ただ、地道な活動も大切である。どういう目標、課題に対応した活動にするのか、小中一貫教育で考えるべきである。この推進協議会もいっしょになって考えるべきである。

(2) 報告2 平成27年度宇治市小中一貫教育についての

アンケート結果について(報告)

資料 「平成27年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書、概要版」に沿って事務局より説明

(副会長)

アンケート報告を聞いていて、全面実施から4年間で前進の様子が見て取れる。ただ、このアンケートは「イメージ的なもの」、「感覚的なもの」と受け取っている。小中一貫教育導入当初から、「中1ギャップ」が1つのキーワードであった。この4年間で「中1ギャップ」が改善されているのかがこのアンケートからは見えにくいという感想を持っている。「中1ギャップ」は不登校、学力の問題である。その数値をこの会議で扱うべきではないのか。それとも、数年後に扱うべき課題なのか、その方向性も聞かせていただければと思う。

(委員)

「不登校の出現」が中1で急激に上がる率がどれだけあるのかが指標だと思う。それが毎年どうなのかというよりも、ある程度のスパン、5年ぐらいの平均を取って小中一貫教育実施前と実施後とで、平均値がどれぐらいの値になるのかを1つの指標としてみても良い。

常に「中1ギャップの指標」で使えるのが問題行動の実人数ではないかと思う。上がるのは間違いないが、「上がる率」がどうなったのか、これも毎年ではなく、一定のスパンで平均的なもので議論ができないかと思う。

数字的なものではないが、確実に一貫教育を実施して変わったのは、入学式の時から子どもの名前を呼べる中学校教師がいるということである。これは確実に違う。非常に大きいと考える。

(委員)

本ブロックも不登校率のデータを残しているが、年々減っている。中1での問題行動の件数も年々減っている。非常に成果が出ていると思われる。本ブロックでは小学校でも中学校の校則をふまえてのきまりや約束を全児童に配布、指導している。中学校での入学式も染髪、ピアスは今年度は一人もいなかった。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

本校勤務9年になる。大変だった時期もあったが、小中一貫教育が進むことによって、教員同士のコミュニケーションも増え、連携が図れてきている。気になる生徒のことを早めに相談できる。コーディネーター会議も月に2回行っているが、その際に気になることを指摘しあえる。情報を共有でき、次の学年の教師に伝えられる。

チーフコーディネーターが2つの小学校に行くことによって、児童の名前を覚えられるし、児童も中学校の教師に声をかけるようになる。中学校籍の連携教員が小学校の授業に入ることによって、小学校6年生の時に指導を受けた教師が、中学校にいてくれるのだ安心だと言っている。不安無く入学してきている。私学に行く率も減った。知っている教師、先輩が多くいることによると考える。

(委員)

宇治黄檗学園においては、小中一貫教育は、中学生への影響が非常に大きいと考える。授業の受け方、学力に関しても良い影響が出ている。小学校時代に担任していた教員がすぐそこにいるので中学校の教員は指導方法を交流できる。廊下を走っている中学生にも「小学校1年生にぶつかるだろ」という指導がすごく効果的である。小さい子への気配り、意識も芽生えていく。小中一貫教育は中学生にとってのメリットが強く感じられる。

(会長)

ギャップは、「子どもたち」のギャップにとどまらないで、「教員」のギャップの改善につながっている可能性がある。

(委員)

保護者にとって分散進学でその中学校ブロックではない児童が別の中学校に行かなければならない保護者の意識はどうなのかが気になる。

木幡中学校も岡屋小学校という分散進学校もあって、「うちの子は木幡中学校へいつているのだが、ブロックは東宇治中ブロックであるのはどうなのか?」「うちの子は木幡中学校に行くのだが、東宇治中学校へ行く方法はないのだろうか」とか不安に感じている。小中一貫教育は、4年経って、すごく成果も見えてきたし、浸透してきてメジャーになってきた。逆に小中一貫教育が浸透していけばしていくほど、分散進学の一部の保護者だけが、「うちの子はどうなんだろう」という不安が増えていくのではないか。

すぐに分散進学解消というのは難しいと思うがそういう保護者への配慮というか、ケアというか、「違う形でちゃんとできているですよ」ということがアピールできる手段があればというように思っている。

(委員)

ブロックジョイントプランという形で、今年度の取組という形と具体的な計画・実施報告があるが、ジョイントプランでの推進度は各校どのような形で整理をしているのか。それが 28 年度の目標・取組とどうつながっていくのか。この会議の1つの目的である進捗管理という点でもご意見いただきたい。

(事務局)

各学校ごとに毎年、学校評価をしている。アンケートもしている。それらを受けて各ブロックごと、協議をし来年度の指標を整理している。

(3) 平成 27 年度宇治市小中一貫教育推進協議会活動について (報告)

①全体会・学校視察概要

資料 (P13) に沿って事務局より説明

②委員による中学校ブロック取組視察の感想

(副会長)

西小倉中ブロックの授業参観、事後研究を視察した。小・中の先生がその違いを認め合いながら、情報を交換していた様子が非常に印象的である。お互いが刺激を受けている様子が伝わってきた。

(委員)

木幡中学校ブロックの小学生の中学校体験を視察した。中学生がたくましく見えた。小学生が「ここへ通いたい」という憧れが先生方の指導によってされているという印象があった。

(委員)

西大久保小学校の「6年生帰国児童生徒理解学習」を視察した。学校同士の距離が近いので、先生たちが集まれる。ブロックの先生たちが日頃からコミュニケーションがとれているなという感じが伝わってきた。小中の連携がとれていると感じた。

平盛小教諭が西大久保小の児童に授業をしたのだが、「日本語を理解できない児童」の気持ちが理解できるような導入、授業もうまくて感心しながら良い授業を参観した。「言葉の力」には重い意味があるのだなと感じた。中文拳もとても良かった。

(委員)

北宇治中ブロックを視察した。初めて現場を見たが、良い意味で衝撃を受けた。小・中の先生たちの研修会はもっと事務的なものと思っていた。先生たちが熱心に、馴れ合いではなく、また、壁を感じさせるものでもなく、子どもたちのために一生懸命いろいろな課題を論議していた。

「もったいない」とも感じた。これだけ先生たちが子どものことを真剣に考えていることをもっと保護者に知ってもらう術はないのかと率直に思った。

(委員)

槇島中学校ブロックを視察した。小学校6年生の入学体験、授業体験と部活体験の両方を視察した。授業体験は中学校の先生がかなり工夫をしていた。実験で子どもを魅了するなど、熱心に取組をしていた。部活体験については、中学校の先輩に混じって、出

来る子も出来ない子もいろいろいたが、「先輩」、「後輩」のつながりを感じた。中学生は教えてあげる、見てあげる。小学生は、先輩の背中を見るではないが、一緒に交流できるという良い活動ができていた。

榎島中学校は分散進学为学校にもなっているが、コーディネーターの先生もその辺り十分に理解していて、それに対する取組を考えてくれていた。そのことが、分散という問題はあがるが、取組は進んでいると感じた。

(委員)

榎島中ブロックを視察した。榎島中ブロックに23年度から3年間勤務した。生徒の半分は知っている。比較的、落ち着いた授業を見ることができて安心した。地道にブロックのコーディネーターの先生たちが頑張っていて推進してくれているおかげだと感じた。私が教務主任をしていた頃と比べると中学校の状態が良くなっていることと、保護者の意識、理解が進んでいる。

小学校同士の授業システムを揃えようとコーディネーターが奮闘していたが、学習のため、まとめぐらいのシステムは揃えるべき。中学校でも同じシステムでやれば、中学校に入学した時に同じシステムで学べると残念に感じた。

(委員)

東宇治中ブロックの合同授業研究会に行った。事後研では、分離型で集まるのが難しい中、如何に教職員の交流を深めるかということで工夫はされていた。課題としては、研究会が交流に終わってしまったように感じた。私のブロックでも同じように深められていない部分がある。

## ②平成28年度に向けて 事務局より(説明)

(会長)

授業をどう変えていくのか。小学校教員、中学校教員が互いに学ぶということは大切なことであるが、それ自身が持つ限界・課題を考え、試し、議論してもらいたい。学び合うということはとても大切だが、ともすれば、お互い遠慮して、踏み込みにくいということがあるのではないか。

小学校の先生は丁寧だというが、それはしゃべり過ぎなのではないか、もっと子どもに練習とか、考える時間とか与えてほしい。もっと子どもに自分で活動させるべきである。

中学校では、「授業」、「業」を「授ける」という形態。教師主導型である。小学校、中学校のよさをそれぞれ活かしながら、小中学校ぶつかつて、高まっていく。

お互い、やったことがないのだけれど、やってみようか、とチャレンジすることなどもお願いできればうれしく思う。事後研でも、違う観点から見て、違う授業ができないか。今の授業は良い、悪いという論議とは別に、「理解できない」、「理解できないけれどまた共に研究してみましようか」という形になっても良いのではないかと感じた。

閉会

・畑下教育副部長より閉会の挨拶

